

平成28年度 県小教研学習指導改善調査【結果分析】第4学年国語

1 調査結果の分析

(1) 読み取り・資料活用・選択について (①～⑧)

ア 資料を読み取る力・・・(①～③)

正答率は、①は85.0%、②は91.1%、であった。インタビューの前後の回答を読み、その回答に合う質問を選択する問題である。昨年度の4学年の同項目で①が76.4% ②が76.6%であり、ポイントとしては、大きく上がっている。前後の文脈を読み取り、適切に選択し選ぶ力が付いてきていると考えられる。③の正答率は、92.9%であり内容を正しく読み取る力が付いてきていると考えられる。

イ 話題に沿って必要な事柄を選択する力・・・(④)

正答率は48.9%である。昨年度の同事項では58.2%であり、ポイントとしては下がっている。「利用者の数」を紹介しなかった理由を問う問題であったが、取材メモの中にある利用者の数についての説明をしている誤答が多い。この誤答の要因の1つ目は、紹介した理由ではなく、紹介しなかった理由を答える経験が少ないため、問題の読み飛ばしや問われている内容の意味が理解できないことである。普段から問われ方の異なる問題に答える経験を積むことが必要である。2つ目は、問題文の条件把握ができていないことである。ここでは、「使う人のことを考えた工夫」を調べるという目的を明確に把握していないことが考えられる。取材メモを基に組み立て表を書く際に、話題に沿って必要な事柄を選択する活動を意識して取り入れていくことが重要である。

ウ 文章を正しく表現する力(常体・敬体)・・・(⑤)

正答率は57.3%である。昨年度の60.6%より、やや下がっている。資料から常体になっている文を見つけ、敬体に直す問題である。該当箇所を見つけ出すことはできていても、文の一部分だけを抜き出してしまい、「また」や句点・読点を書き落とす等の誤答が見られた。「文」の意味をとらえ直すことが必要である。また、「文全体を正しく書いているか」「句読点が落ちていないか」「叙述を落とさずに書いているか」といった観点を設けて、書いた文章を友達同士で読み返す活動が有効である。

エ 話のまとまりごとに段落を変えて文章を記述する力・・・(⑥)

正答率は88.4%である。今年度新たに出题された内容であるが、段落のまとまりをとらえて文章を記述する力は概ね付いていると考えられる。今後とも、文章全体における段落の役割を理解するように書くことや読むことにおいて、指導を継続していくことが大切である。

オ 内容に応じて資料进行分类する力・・・(⑦・⑧)

正答率は、⑦は76.4%、⑧は78.5%である。どちらも分類したメモのグループに「～のことを考えた工夫」という見出しを付ける問題である。「どのような人のことを考えた工夫か」を問われていたが案内図の文章をそのまま書き写し「体の不自由な人もお年寄りも安心」と答え、「も安心」を入れて記述したり、案内図にない言葉を記述したりする誤答が挙げられる。問題で問われていることを理解し、見出しに合った言葉に書き改める力が不足していると考えられる。今後は、パンフレット型の資料など、非連続型テキストから必要な情報を読み取る経験を重ねていくことも大切である。

(2) 記述問題について (⑨～⑫)

ア 資料を読み取る力(終わりの文を記述する)・・・(⑨)

正答率は64.2%で、昨年度の同項目の正答率43.0%を大きく上回る結果となった。紹介文の組み立てを考え、「終わり」の部分を書く問題である。今年度は、出題の仕方を少し変え、出だしと結びの言葉を指定したうえでの結果である。誤答としては、「始め」の繰り返し、後の文に続かない、「始め」と「中」に対応していないことが挙げられる。また、森さんが書いた紹介文のまとめを参考にしていなかったり、森さんの文を詳しく書き直したりする誤答も挙げられた。今後は、「始め」の部分の繰り返しで終わらないよう「始め」と「中」の両方の話題にふれながら、全体をまとめるよう指導することが大切である。その際に、児童の書いた作文を「始めー中ー終わり」に分け、それぞれの部分に焦点を当てて、文章構成を見直す活動も効果的である。具体的には、「始め」と「中」が整合していない

文章を提示し、整合しない根拠を述べさせる活動を通して、文章構成を理解させることが有効である。また、実態に応じて出だしや結びの文を指定しながらの段階的な学習も必要となる。

イ 時間内に指定された文字数で文章を記述する力・・・(⑩)

⑩は、指定された文字数以上で文章を書こうとする学習意欲と、実際にどのくらい書けるかという技能をみとることができる設問である。今年度の正答率は、75.5%、27年度の正答率は68.8%である。26年度の正答率が79.3%、25年度が80.1%であり、昨年度より少し上がり、記述力がやや改善している。しかし一方で誤答率は13.8%、無答率は10.8%ある。この設問での誤答は文字数が指定された字数に足りていないこと、無答は全く記述がなかったという実態となる。この誤答と無答を合わせると、全体の24%に達していて、今後の指導課題であると考えられる。今後は、字数や時間の制限の中で書く経験を重ねることが何より重要である。さらに、書くことに苦手意識をもつ子に対しての丁寧な支援が必要となる。日常生活の中でも、子どもが書きたい意欲をもつような話題を取り上げ書くことを積み上げる必要がある。そのためには、日々の授業や活動の中で「書く」活動を積極的に取り上げ、学年に応じた段階的な指導を心掛けていくことが大切である。

ウ 話題に沿って必要なメモを選択し、記述する力・・・(⑪)

問い五が未記入であったり、問い五で選んだ内容と違う内容について記述したりしている場合も誤答となる。また、文字数が規定字数未満の場合に無答となることから、正答率は、54.6%と低めとなっている。誤答の例としては、図書館についての森さんの紹介文を参考にしているため、スーパーの紹介文ではなく、図書館の内容を記述した文章になってしまったり、選んだメモを使わずに他のメモを使って書いた紹介文になっていた。これは、別のテーマの紹介文を参考にしながら、書くべきテーマの紹介文を書くことへの混乱から誤答が多く見られたと考えられる。参考にする紹介文では、文型や構成の仕方、文末表現などにアンダーラインを引きながら参考点を整理した上で、話題に沿って選んだメモから、紹介文を書くという段階的な指導がポイントとなる。

エ 段落を意識して記述する力・・・(⑫)

⑫は、「始め（紹介すること）－中1，2（工夫一・二）－終わり（まとめ）」の4段落構成で記述する力と、段落ごとの書き出しを1字下げで書くという基本的な力が要求される設問である。どちらか片方だけでできていても正答にはならないため、正答率は55.9%と低めになっている。誤答としては、段落を一字下げで書くことができないことや、4段落で構成できないことが挙げられる。段落構成については、低学年から「始め－中－終わり」という基本的な文章構成を、書くことと読むことの両方で確実に理解させ、作文技能として習得させる必要がある。さらに、中学年では組み立て表を活用しながら、中を内容のまとまりに分けて書く学習を繰り返し行う必要がある。

2 今後、重点的に指導してほしい活動

(1) 国語の学習で

- 話題に沿って必要な事柄を選択し、組み立て表を活用して書く活動を意図的に設定すること。
- 内容のまとまりとして段落をとらえ、書き出しの一字下げなどの指導を繰り返し行うこと。
- 「始め－中－終わり」の構成を意識し、字数や時間の制限の中で書く経験を積んでいくこと。
- 目的に応じて、書いた文章を見直し、整った文章にする習慣化を図ること。

(2) 他教科や総合的な学習の時間で

- 取材、見学、観察などの活動において、メモを取り、そこから必要な情報を取捨選択し、選んだ内容から文章を書くという一連の書く活動を多く設定すること。
- パンフレットや図、表、絵地図等の非連続型テキストにふれ、解釈の仕方や読み取り方を学習し、目的に応じて取捨選択する機会を多くもつこと。